

米國に於ける黑人教育の發達

小西重直

多種類の異民族を國民化することは米國に於ける大なる問題の一である。今回の戦争に米國が参加するに至つた裏面の理由の一も此問題の解決の爲めであるといはれて居る、殊に黑人同化の爲めに從來如何なる教育が行はれ、現在は如何なる状況であるかを知することは興味ある問題であると考へて居つたのであるが此頃の新紙には西部戦場に於ける黑人の勇猛なる戦闘振が傳へられ黑人教育に關する余の興味は一層高められたのである。然るに丁度此際目下米國に留學中なる京都文科大學の矢野仁一氏より米國政府出版の黑人教育に關する最近の調査(Negro Education)なる書籍二卷、及米國教育年報(千八百九十六—七十二年第二卷)の惠送を受け黑人教育に關する研究の上に非常に有益なる参考資料を得たのである。是に於て之れに從來の参考書をも併せて參照し黑人教育發達の概要を紹介し矢野氏の厚意に酬ゆる一端となし且つ謹んで同氏に感謝の意を表したいと思ふのである。

尙前以て斷つて置きたいが negro 黑人といふ名稱は羅典語の nigr(黒)より來りしものなるべしといふことであるが米國の黑人は眞の純粹の黑人又は之れに近いものもあるが白人や亞米利加印度人其他のものとの雜種も澤山にあるのである、余は negro 黑人なる言葉を普通の慣用に從ひ此等の凡てを包含する廣義の意味にて使用するのである。

黒人が米國に渡來せる著しき事實は十六世紀の初め頃より西班牙の探險家や移住民が其従僕として黒人を米國に連れて來た以來の事といはれて居る。米國に於ける英人殖民地に於て使用せる黒奴の賣買に關する著しき古き事實は千六百十九年に和蘭船が二十名許の黒人を亞弗利加よりヴァージニアのセームスタオンに陸揚せることであつて丁度メーフラワー船が米國に宗教的文化を移植せる一年許前の出來事である。其後黒奴の賣買が漸次盛になるのであるが白人殊に賣買に従事する白人の黒人に對する態度は實に亂暴なものであつて殆んど動物扱である、否な動物に對しても忍び得ざる様な殘酷な取扱であつて恰かも木石同様に見て居つた様である。船中に於ては荷物の如く取り扱はれ或は狭き暗き船室に詰詰となされ、而かも男子の大人は二人づつ鎖にて繋がれ女子は船員に弄ばれ、船員に反抗する者は男女に拘らず殘忍な方法で殺され、航海中病氣の爲めに死するものも少からず、時には死體が彼等の密集雜居する間に其儘に委棄せらるゝこともあつたといふことである。十七世紀中頃に起つた事實の一として船員が亞弗利加海岸の黒人部落を砲

撃し若干の黒人を捕獲する等恰かも獸獵に等しき方法によりて無理に黒人を捕へ來たれることもあつたと傳へられて居る。(Shutfield—The Negro 1907: 52p—57p)又買主なる主人の方に於ては其小農家にありて主人と黒奴との主従の關係が直接的であつて主人自身から虐待を受くこともある代りには時々は親切にされることもあり、殊に其家の主婦や子供等と直接に親み英語などを自然に學び覺へることも出來たのであるが、大農の家に使役せらるゝ者は直接主家と親む機會が少く農園監督者の下に機械的に勞働するのみであつた。要するに買主なる主人側に於ても黒奴の人格などといふことを考ふる者がなく、英語を教ふる農家でも風の變つた黒ん坊が英語を覺へるといふ様な好奇心や、使役上の便宜の爲めであつて人間としての黒人に教育が必要であるといふ様な考があつた譯ではなう。(Story of the Negro—B. T. Washington 1909, Vol I 147—150p)此故に黒人を人間視し黒人教育に關する組織的の考が立てられたのは黒奴賣買に従事する者や、其買主の側からではなく、實に宗教團體の力であつたのである。米國に移住民を送つた英本國の宗教家は早くも亞米利加印度人を基督教化せんと企てたが、千六百二十年には不完全ながらも黒人を基督教化せんが爲めにヴァージニアに初めて學校を設立したのであるが、千六百二十二年の印度

人暴動の爲めに此學校は破壊されてしまつた。其後八十年許りの間は教育上殆んど見るべきものなく唯僅かにムードとかいふ四人の兄弟が代々黒人を教育し千二百人の門弟を出せりとの記録が残つて居る位のものである。漸く千七百〇一年に至り英國に於て亞米利加印度人及黒人に基督教の福音を傳へんとの協會が起つてトーマスなる宣教師が南カロリナに於て二十名許の黒人に英語を教授したといふことである。千七百〇四年には佛蘭西新教派のノーといふ宣教師が紐育に於て宗教問答學校を設立し亞米利加印度人及黒人を教育せしが千七百十二年に紐育に起りたる黒人の暴動は此學校の煽動によるとの疑を受け遂に閉鎖されてしまつた。

千七百三十八年には United Brethren がペンシルヴェニア等に於て黒人教育を初め千七百四十五年には Society for propagating the Gospel in Foreign parts は南カロリナ等に於て黒人教育に従事し、千七百四十七年にはプレスビテリアン教會はヴァージニアに於て同様の事業に着手し、同年ジョルジアに於ては地方の代表者の會合を催ふし黒奴を有する主人は黒奴の幼年者には教育を施し大人に對しては宗教の福音を傳ふることに力むべしとの決議をなした。千七百五十年にはベィコンといふ宣教師はメリーランドに白人及黒人の貧民兒童に對する學校を設立した。殊に千七百九

十年に於てはメンデスト派の協議會が開催され白人及黒人の貧民兒童に對する教育の方法に就て相談し、日曜學校を設け午前は六時より十時迄、午後は二時より六時迄の間に於て勞働に妨なき限り兒童の教育に當り且つ教科書をも編纂すべしとの決議をなしたのである。

斯の如く宗教團體は其人道的見地より黒人教育の發達に力を盡す所があつたのであるが、政治的見地及經濟的見地より見れば自由開放の思想を起さず、從順に勤勞な黒奴たらしめんことを要求する所から黒人の教育を危險視して此を禁壓するの方針が南部の諸州に表はれて來て居るのである。即ち南カロリナに於ては千七百四十年に黒奴の教育を禁止し若し之れに教育を授くるものあらば百磅の罰金に處することになした、千七百七十年にはジョルジアに於ても同様の令を出し違反する者は二十磅の罰金を以て此を處分することにしたのである。千七百九十二年頃に至り綿種を取り去る器械が發明され南部諸州に於て益黒奴の勞役の必要を感じ、教育は盲從的勤勞に對しては寧ろ有害にして危險なりとの考が漸次高まつて來たのであるが、他方に於ては政治上佛國革命の影響もあり千八百年にはヴァージニアに於て黒人暴動が計畫され、千八百〇四年には佛國殖民地ハイチに於ける共和島建設

となり、千八百二十二年にはデンマルク、ヴェネチア、千八百三十一年にはナット、ツルナなどの黒人暴動が起り、黒人の勢力が漸次政治上の重大なる問題となり、南方の諸州は益々黒人教育を禁壓するに至つたのである。即ち千八百十九年にはヴァージニアに於ては黒人一般に對して夜の集會及晝間夜間の讀書、習字等一切の教育を禁じたのである (Ibid Vol I 173p; Vol II 118-123p) 千八百二十九年にはジョルジア州に於ても黒人教育禁止令を出し、黒奴も自由黒人も白人も若し黒奴又は自由黒人に手にて書かれたる文字又は印刷に付せられたる文字の讀み方、書き方を教授する場合には其教授者が黒奴又は自由黒人ならば罰金と笞刑に處し、白人ならば五百弗以下の罰金と拘留に處するとし、*Butler-Education in the United States 1916, 902p* 翌年ルイジアナに於ては自由黒人の入國を禁じ、又黒人間に煽動的印刷物の配布や一般に其教育をも禁じたり。其翌年即ち千八百三十一年にはミシシッピに於ても自由黒人奴隸、黒人に宗教上の説教をなすことを禁止し、アラバマに於ても其翌年に至り一般黒人の教育を禁止し、千八百三十五年には北カロリナに於ては自由黒人の學校を廢し、黒人を兩親とする子孫は四代目迄公立學校の恩典に浴するを得ざることと爲し、ミシシッピやミッソリも亦同様の禁止令を出したのである。然し好學心の盛なる黒人は從來受けたる

教育は縱令低度のものであるとも出来る丈其の存續を圖り南カロリナ其他一二の州に於ては秘密に學舎を置きて自由黒人の兒量を教育し又父は白人にして母は黒人なる雜種兒は或は佛國又は米國北部の學校に送られて其學を繼續せるものもあつた。南部に於ても亦フロリダ、テキサス其他三四の州に於ては自由黒人の學校は其儘保存されたのである。要するにワシントン氏の説によれば奴隸時代に於ては聖書を讀み得る丈の教育を受けたる者は次の四の方法の何れかによるものであつた。一、禁止令に拘らず其主人より學びしもの。二、白人の父を有する者。三、色々の方法で教育の自由を得し者。四、眞に文字通りの意味に於て教育を盗みたる者。

黒奴制度に反對して黒人自由の唱導者となり又曾て *North Star* 紙の主筆として有名であつた雜種黒人フレデリック・ドウグラスの如き其幼時に於ける學習は或る意味に於てワシントン氏の所謂教育を盗みし者の一人である。彼は幼時ボルチモールにて奴隸生活をなして居つたのであるが、初めは主家の婦人より英語などを學びたるが禁止令と共に最早其便宜を失ひたるを以て、路傍の白人の兒量と遊び人家の軒下に貼り付けたる廣告などを利用し、白人の子供に對し若し此を讀み得たるものには玩具や菓子を與ふべしなどと巧に彼等を欺き、彼等の讀むのを側より聞き取り

て英語を學びしこともあり、或は下水の溝に棄てられた屑紙などを拾ひ上げ、其中の文字を讀みて學びしこともあつたといふ話である。又はウエブスターの綴書などを私かに買ひ求めて白人の子供より私かに學びしこともあり、殊に彼が黒奴開放の思想を得たりと稱せらるゝ讀本 *Columbian Orator* の如きも全く白人の子供より其書名を知つたといふことである。

北部諸州に於ては南部諸州の如く苛酷なる教育禁止はなさざりしも、黒人の爲めに學校を設立せんとして、市民の反對を受け果たすことを得なかつたものもある。禁止令は出さざるも教育の設備をなさずして毫も積極的に教育に注意せざる場合もあつた。然し一般には南部諸州に比して黒人に同情を有しヒラデルヒアや紐育やボストン其他に於ては黒人教育に就て見るべきものが少くなかつたのである。(見 *J. Washington-Story of the Negro Vol II 122—136p*)

黒人の教育は斯の如く禁止壓迫によりて進歩することが出来なかつたのであるけれども、實は白人側に於ける教育殊に小學教育の如きも十九世紀に入りホレイスマンやバーナード等の献身的努力が表れる以前は非常に幼稚なものである。而かもマンの力によりてマッサチューセツ州などに於ては千八百四十年代に就學兒童は

1206

八十パーセント餘に上り居るも米國一般には尙ほ低度であつて千八百六十九年より同七十年に亙る統計にては米國全體の人口は約三千八百五十五萬餘で五歳より十八歳迄のものは千二百〇五萬餘あり此中小學の課程を修むる者六百八十七萬餘即五十七パーセントに當り此中日々出席するものは僅かに五十九パーセントに過ぎぬ有様である(Dexter-History of Education in the United States 1904: 164p)

二

以上は奴隸時代に於ける黑人教育の梗概であるが、南北戦争の初めより戦争後黒奴開放の時代に入り黑人の教育は漸次發達の曙光を認めらるゝに至つたのである。シエサーフホード氏は南北戦争の始まらんとする頃即千八百六十年頃より千八百七十五年即黑人教育が組織的にならんとする頃迄を黑人教育の第二期となし、此間に於ける教育の特色を軍隊學校と宗教學校の二となして居る。千八百六十一年に北軍の猛將バトラーは American Missionary Association の代表者をヴァージニアの征服地に送り黑人に宗教々育及讀書習字等の教育を施さしめ、又衣服などを分配させたのであるが、殊に一般に北軍にありては南方より脱出逃走して北軍に投ぜる黑人に對

しては軍隊内に於て夫々教育を施したのであつて所謂軍隊學校の名を得るに至つたのである。千八百六十五年三月戦争の終らんとする少し以前にホーワード將軍の下に開放黑人救済局が設けられ黒人の救助及教育を實施し教育に關しては千八百七十二年頃迄實際に援助を與へたといふことであるが、此救済局の力によりても所謂軍隊學校の成績が佳良となり、殊に一般の學校も漸次に建設され、千八百六十六年には九百七十五校、九萬九千人餘の生徒、千八百七十年には二千六百七十七校、黒人約四百八十八萬人に對し十四萬九千餘の生徒があり、尙此外に日曜學校や夜學の私立學校に於ても相當の教育が行はれたのである。(Weatherford—Negro life in the South 1911: 94—95p; Negro Education Vol I 289p)尙戦争中北部諸州に於ては黑人救済會が諸所に設けられ教育上にも力を盡したのであるが、殊に各派宗教團體は戦争以前にも多少教育的活動を開始し戦争中及殊に戦争後に於て盛に學校を起し黒人を基督教化せんとすると共に英語教育に非常なる力を盡して居るのである。黒人側に於ても戦後黒奴開放と共に久しく飢渴に苦みしものが俄かに飲食を得たるが如くウェブスターの綴書は至る所に表はれ軍隊にては士官を擁して文字を學び、家庭に於ては之れ迄で屋隅に隠匿したる書物を出すもあり、新に購入するもあり、六十歳七十歳の

高齡者も綴書や聖書を手にし、學校の設立を待つ暇なく朝は日出前に起き夜は松株の火の光で勉強するものもあり、農夫の中には鋤に書籍を繋ぎて耕作の間に學ぶものもあり、鑛山の坑夫の中には地下數百尺の薄暗がりの場所に於て學ぶものもあり、學校も成るべく一日も早く開校を急ぎ或は地上に柱を立て草を以て雨や日光を防ぐもあり、或は樹下綠蔭を其儘教室に利用するもあり、教師も専門の教育家を待つ暇なく他のものより少しにても多くを知れる者は直ちに教師となり、又甲は讀み方の力あるも書き方は拙劣、乙は書き方に巧なるも讀み方に拙なき場合には甲乙双方互に交換教授をなすなど一般に熱心なものであつた、是れワシントン氏が其開放當時十年間許の状況を寫せるものにて多少誇大なる點があるであらうと思ふが兎も角熱心の状況の一斑が窺ひ知られるのである。(Washington-Ibid; Vol II 1:6-138)

黒奴開放以後に於て黒人教育上特に注意すべきことはヴァージニアに於けるハムプトン校の設立である。此學校は北軍の將軍で黒人隊の指揮官であつたアームストロングによりて設立經營されたので、開校は千八百六十八年である、設立者の考にては、一面には黒人の自重、勤勞の精神を養ひ日常の實踐道德に重きを置き、將來自活

の方法として農業、手工、簡易工業、女子の裁縫等實科的方面の教育を施し、又他面に於ては黒人の教師養成の必要を感じ Hampton Normal and Agricultural Institute なる名稱とし普通教育、實業教育、師範教育を施す場所となしたのである。創立の際には American missionary association や開放黒人救済局の援助を受け千八百七十三年以後は合衆國政府よりの補助をも受くることになつたのである。創立當時は僅かに二十名の教師と二人の職員なりしが今日では七百六十餘人の生徒、二百人餘の職員となり三年前迄ワシントン氏が校長であつたタスケージの黒人學校(Negro Education Vol II 62—67p; Washington and Du Bois-Negro in the South 1907: 45—51p)と相並びて黒人學校の双壁となつて居るのである。而して此學校の黒人教育に對する重要な意義は實に其實業教育に存するのであつてキエサーフホード氏は黒人教育の等三期を劃するものとなして居るのである。(Mrs. Armstrong and Lindlow-Hampton and its Students 1874: 23:40p; negro Education Vol II 625p)

三

斯くて奴隸開放後に於ては合衆國政府の補助や、各州の經營又は補助は勿論宗教

團體の援助、個人篤志者の同情、黑人自身の自給等によりて各種の學校教育が盛に起り奴隸時代に於て物件視せられたる黑人も漸く稍人間的の取扱を受け米國の國民市民としての教育の恩澤に浴する事が出来る様になつて來たのである。其進歩の實際を見るのに南北戰爭開始の前年即ち千八百六十年には黑人約四百五十萬人にして文盲者は約百分の九十乃至九十五位なりしが近頃では黒人人口約一千二十五萬の中十歳以上の者の文盲者は僅かに百分の三十餘に過ぎぬ様になり西班牙人や露國人等に比して遙かに進歩して居るのである。小學教育普及の割合も千八百七十六年には黑人々口約五百七八十萬に對して就學兒童數は五十七萬餘であつたが此頃では人口は約二倍になつて居るのに就學兒童數は三倍以上即ち百八十九萬餘になつて居る、黑人の最も多數なる南部十六州及コロンビヤ、ミソリ地方に於ては六歳より十四歳迄の黑人兒童中就學する者は五十八パーセント以上であつて此中日々出席する者は就學兒童數の中約六十三四パーセントになつて居る。而して此等の諸州に於ける黑人中學校は公立百六十四校生徒男女合せて一萬五千四百餘人である、此學校の中六十五校には手工部を、二十校には教師養成の師範科を、六十七校には農業部を、七十五校には家事部を置いて居る。カレリジ程度の教育を授くる學校は三

十校以上であつて生徒男女合せて一萬以上になつて居る。此外醫學、法學、工業、農業、師範教育、牧師養成の學校なども設けられ各方面の教育が漸次發達の傾向を示して來て居るのである。(Report of the Commissioner of Education 1916 Vol. II 586—589; Negro Education Vol. II (6—20p))

今教育進歩と密接の關係を有し或は其進歩の原因をなし又は其進歩の結果とも思はるゝ所の黒人の生活の實際に就て見るのに黒奴開放以後に於ては土地所有者の數も増加し所有地も擴大しワシントン氏の説によればジョルジア州などに於ては千八百六十六年より十年許りの間に黒人所有地の廣さは約四十五倍に達し、千九〇九年頃には南部諸州の黒人地主は三萬立方哩の土地を有し其廣さはヴァモント、ニューハンプシャイア、マッサチュセツ、コネチカット、及ロードアイランド等五州の面積に殆んど匹敵するものであるといはれて居る。(五州の總面積は三萬三千七百二十五立方哩。(Washington-Story of the Negro Vol. II 40p, 47p.) 又黒人の職業は千九百年の統計にては農業に従事するもの最も多く其實數二百萬以上に上り、黒人人口の五分の一以上を占め他人の家に奉公する者が百三十萬以上に上り、黒人人口の約九分の一を占めて居るが奴隸時代には餘り見ることの出来なかつた諸種の公業、商業、工業等

に於ても漸次其數を増加し商業に従事するものは約二十萬人以上、工業に従事するものは二十七萬人以上の數を示し殊に諸種の公業に就くものは四萬人以上に達して居るが此等は慥かに或程度迄は教育普及の結果に外ならぬのである(Ibid 67p)殊に黒人婦人の如きは社會に於て漸次重要な地位を占むるに至つたのがあるが千九百年の統計では黒人全體の職業に對して黒人婦人の職業中五十一パーセント餘は奉公、三十二パーセント餘は公業、二十七パーセント餘は農業、十二パーセント餘は工業となつて居るが殊に此公業の中には千三百五十五名の教育者あり百六十四名の牧師あり八十六名の藝術家音樂教師あり二十五名の文學者科學者あり十一名の雜誌新聞記者十名の法律家七名の齒科醫などあるが此等の公業は多くは教育の結果と見らるべきものである。(Ibid 303—304p);

四

奴隸解放後に於ける黒人教育は奴隸時代の夫れに比すれば實に天地の差があるともいはるべきであらうが、其内容に至りては尙餘程幼稚なものらしいのである。學校の設備も一般には不完全のものが多く、教師も低級のものである。又白人より見

たる黑人教育は其知識の増進よりは寧ろ日常の道德に力を致す必要ありと言はれて居る。之れ黑人の犯罪者は白人よりも多く又常に虚言の癖があるからで有る。

尤も黑人の犯罪は移住外來の白人の中の伊太利人、埃太利人、佛國人、露國人などよりも其率が少いのである。ワシントン氏は千九百四年の統計を引用して居るが伊人の犯罪者は千人中四、四。埃人ののは三、六。佛人ののは三、四。露人ののは二、八。黑人のは二、七。となつて居る。然し大體に於て黑人の犯罪は少いとはいはれないのである。から道德教育に重きを置く必要がないとはいはれない。否な元來教育は犯罪の如何に拘らず道德的人格を練り上ぐべきであるから教育本來の目的より見るも此意見は退くことが出来ないものであらう(Ibid Vol II 103p; Shannon-Racial Integrity 1907 249p)

然しまた犯罪には經濟狀態の壓迫より起るものが少くはないのであるから一面には實業教育の發達によつて彼等の經濟的生活を改善せねばならぬとの意見もあるのである。前述ハンプトン學校やタスケージの學校の如き一面には此點に大なる注意を拂ひつゝあるのである。實業教育は道德教育と相並んで黑人教育上の大なる問題である。尙南部に於ては大抵黑人の學校は白人のと分離して設けられてあつて之れに對して合同教育を主張するものもあるが、之れは一概には考へられぬ

ことである。南部諸州に於ては黒人の人口は約三十パーセントで白人のは約七十パーセントの割合になつて居るが都市によりては黒人の人口が百人中五十より九十位の場所もあるから白人の立場より見れば白人の子供の方が少數であつて却て黒人化さるゝ恐があるのである。然し黒人の人口の割合の少い場所に於ては相當の人数を限り白人と合同的教育を施さば黒人同化にも便宜であらうと思はれるのである。朝鮮や臺灣に於ても同様の事情があるのである。終りに臨み教育内容の能率を高むる方法としてシャンノン氏は幼稚園教育の發達を主張して居る。之れに對して同氏は二の理由を擧げて居る。其第一は黒人は一般に摸倣心に富み創意力に乏いのであるが手技などによりて創意力を養ふ所の幼稚園教育を施したならば幾分此を矯正することが出來やう。第二は黒人の家庭は未だ甚だ整はざるものであつて兒童の躰は不行届であり、兒童の精神活動を指導する力がないのである。故に寧ろ幼稚園の教育によりて此弊を救ふべしと説て居る(Child 345—346)此意見は幼稚園が相當のものであるならば正當の考と思ふのである。朝鮮に於ては鮮人に對する普通學校に入學の時期を八歳となし、臺灣に於ては蕃人兒童は八歳所謂本島人には七歳となし、北海道のアイヌ兒童に對しても先年たしか八歳と改正された様

に思つて居る。現在の有様では此位が穩當と思ふが若し幼稚園又は小學の幼稚科に於て相當の教育を施さばモ、少し小學教育の時期を早めることも出来るであらうし、又非教育的なる家庭生活の代りに相當に秩序ある指導保育の實を擧ぐることも出来、將來小學教育を施すに當り一層効果が擧るであらうと思ふのである。元來幼稚園教育は小學教育に對して效果あるや否やは内地に於ても議論のある所なれども、新領土や殖民地に於ける新同胞に對しては餘程内地と事情を異にし、兒童の躰方や言語教授に力を盡すことが多いのであるから少くとも此點より見て幼稚園教育又は幼稚科の制度は有益であらうと思ふ、殊に幼兒の時期より日本語を少しづつにても自然に教へたならば實用上の言語教授上餘程の便宜がある様に思はれるのである。幼稚園的教育は黑人教育上の問題であると共に日本の新同胞の教育に對する重要な研究問題である。

尙米國の白人教育は漸次に時代を追ふて英國、佛國、獨國の思想の影響を受けて居るのであるが黑人教育が此等の思想と如何なる關係を有するやの問題に就ては研究資料乏しく研究上頗る困難を感じざるを以て本稿に於ては之を省略することとしたのである。

備考、*Story of the Negro*の著者ブーカー、ワシントン氏は黑人教育家として有名な人であつて、千八百八十一年タスケージの黑人學校即師範及工業學校の開設せらるゝや其校長となつて黑人教育に盡力し千九百十五年逝去したのであるが、モンロー氏の「教育百科学書」中に於ける黑人教育に關する記事も、バトラー氏の「米國教育」中に於ける黑人教育に關する記事も盡く皆同氏の筆に成れるものである。余も本稿に於て同氏の「黑人に關する話」中にある記事を其儘紹介した部分が少くはないのである。元來黑人にして黑人に關する書を著はすものは自然に黑人に味方して之を辯護し、白人は之れに反して黑人の暗黒面を描き出さんとするの傾向がある様に思はれるのであつてワシントン氏の著書も多少此嫌がある様にも思はれるのであるから紹介引用に就ては相當の注意を拂ふた積りであるが識者の高教を仰で訂正したいと思ふのである。尙ワシントン氏の著 *Future of the Negro* は本稿を草する迄に手に入らざりしを遺憾とするのであつた。